

東坡先生全集

現代日本紀行文学全集

南日本編

ほるぷ出版

現代日本紀行文学全集 南日本編

監修 志賀直哉

佐藤春夫

川端康成

小林秀雄

井上靖

発行日 昭和五一年八月一日 発行

発行所

東京都新宿区新宿二一九一三
電話 東京〇三―三五四―七〇三二(代)

株式会社 ほる出版

代表 山浦喜三夫

総発売元

東京都新宿区新宿二一九一三
電話 東京〇三―三五六―六二二一(代)

株式会社 ほる

代表 中森蒔人

制作 東京連合印刷株式会社

目次

〔瀬戸内海〕

瀬戸内海縦断の旅 阿川弘之 3

内海点描 吉井勇 7

〔愛媛〕

初旅の残象 安倍能成 13

南予枇杷行 河東碧梧桐 17

四国から近江路へ 小杉放庵 21

〔高知〕

東京から四国への道 獅子文六 27

土佐 安倍能成 30

高知 安倍能成 37

岬の僧坊にて 上林晁 41

海南雜記 吉井勇 62

土佐の和紙村 壺井栄 67

〔徳島〕

海南小記 吉井勇 73

徳島見聞記 佐藤春夫 82

四国四話 大内兵衛 89

〔香川〕

にはかへんろ記 久保田万太郎 94

琴平 宮本百合子 107

四国の旅 柳田國男 111

〔福岡〕

五足の靴 與謝野鉄幹・北原白秋・木下杢太郎・吉井勇・平野萬里

筑紫雜記 吉井勇 156

豊前鏡山 土屋文明 164

水郷柳河 北原白秋 168

〔佐賀〕

有田紀行 火野葦平 175

松浦あがた 蒲原有明 182

からのみなど 保田與重郎 194

〔長崎〕

海道の砂 その三 折口信夫 204

対馬 火野葦平 207

海洋の旅 永井荷風 212

今昔の長崎 宇野浩二 219

長崎再遊 新村出 228

再遊長崎 佐藤春夫 231

長崎の印象 宮本百合子 234

考史遊記 桑原武夫 247

雲仙 野上彌生子 255

〔熊本〕

天草の春 長谷健

257

山里 阿部知二

264

久恋の地山鹿温泉 尾崎士郎

270

〔天分〕

小国 高浜虚子

276

耶馬溪の一夜 田山花袋

301

由布院行 中谷宇吉郎

306

佗しい放浪の旅 徳田秋聲

313

〔宮崎〕

日向路 野田宇太郎

317

高千穂日記 尾崎士郎

322

国見ヶ丘にて 尾崎士郎

324

九州の旅 長與善郎

327

〔鹿児島〕

八月の霧島 吉田絃二郎

337

南国紀行 斎藤茂吉

347

佐多岬紀行 井上靖

374

屋久島紀行 林芙美子

392

大隅国喜界島 辻村太郎

403

〔沖縄〕

海南小記抄 柳田國男

408

沖縄の旅 浜田青陵

425

南
日
本
編

瀬戸内海縦断の旅

——広島から松山へ——

阿川 弘之

東京から四国九州への旅となると、大分大げさな事になって、中々思いたてないが、広島あたりからだとも程感じが気楽なものになる。私は一年に一度くらいは広島へ帰省するので、其の時には広島を根拠地にして、思いつくままの旅に出るが、手輕で経費もあまり掛らず、面白い旅が出来る事が多い。

伊予の道後温泉なども、広島からは日歸りで、結構楽しい旅行が出来た。

朝八時に宇品から、白塗りの二百何十噸かの「第十一東予丸」という連絡船に乗り込むと、呉線沿線の吉浦、鍋、音戸などに寄って、十一時半には四国の高浜の栈橋へ着けてくれる。

宇品の栈橋を船が出ると、遠くの三菱のドックに、三井の

明石山丸がねむったように浮んでいる。くらげがぶかりぶかり浮いている。鱈か何か大きな背の黒い魚が、船に驚いて、ゆっくりダイビングの姿勢で底の方へ逃げて行くのが見える。島の、高い所まで耕された段々島。船のボーイは、暇と見えて、白い服を舷にもたせかけて、気持よさそうにじっと眼をつむっている。要するにすべての物象が昼寝をしているような感じだ。江田島の海岸に、何か英軍の軍需物資が集積してあるらしく、処々に、「二〇〇米以内航行禁止」の札が立っているのが、瀬戸内海の昼寝の夢を乱しているくらいのものである。

吉浦——荷台に大きな荷を積んで、自転車ごと乗り込んで来る客がある。目的地へ上ると、これで此の儘すうっと商売に走り出すのだろう。安直なものだ。段々島を耕している農夫にも、自転車の小商人にも、容易でない生活があるうし、悲惨な話もあるかもしれないが、明るい日光と穏やかな風色とが、どんな傷でもやわらかに癒してしまいそうに思われる——そういう柔かな景色だ。

フォート・ラングレーと名の読める英国の貨物船と、軍船が一隻見える。第十一東予丸は、あの何となくユーモラスな、「ポワーン」という汽笛を鳴らして次の港へ進んで行く。船の汽笛にも中々性格があつて、大型船の、「ヴォオオオー」という腹の底に響く汽笛には、何となく大洋を越える重々しさがあるし、港のタグボートやパイロット・ボートの、「ヒュ

ツヒューウツ」という汽笛は、又、何となく精悍で忙しそうな感じがある。そして東予丸級の「ボワーン」は瀬戸内海の小さな港々に全く似つかわしい。

漁師が食った滓か、或いは他の大きな魚に食われた残骸か、鳥賊の甲らが、幾つも、波の無い海面を流れている。

鍋——棧橋は昔の日本海軍の敷設艇か何か艤装を取り払った船体がそのまま使っている。赤さびて、藻が沢山ついて、一種の感慨を覚える。高い金を出して買ったラジオが、駄目になって子供の玩具になっているような感じでもある。此の辺は、昔は日本の水兵たちの姿を沢山見かけた所だ。船が後じさり、棧橋を離れる為、スクリューで海を掻き廻すと、船尾の方一帯が、鮮かな緑色に湧きかえって、実に美しい。水の掻き廻されない所は、紺色に、底までよく澄んで、きらッきらッとして魚が餌をあさっている。

それから音戸の瀬戸を通して、音戸の棧橋に着く。音戸の瀬戸は、呉市の南の半島部と、倉橋島という島との間の、狭い、手の届きそうな瀬戸で、周知のように、平清盛が開鑿したと云われている所だ。さびた色の、風浪にいたんだ崩れそうな石崖の上に、民家が建ち並んでいて、其の石崖からすぐ深く青い、瀬戸の海が陥入して、中々趣がある。此処に戸田という旅館があって、私は子供の頃、何度か魚を食べに来た事があった。

其の旅館は、やはり海の石崖の上に建った三階建かの旅館

で、部屋に通されて、下を見ると、丁度真下に生け簀^すの舟が浮かべてあって、宿の男がその舟へ降りて行って、あちこちの蓋を開けて、網でしゃくって、魚を見せて呉れる。伊勢海老、真鯛、鱈、ばら、はも、どれも皆、瀬戸の強い潮流に身がしまつて、びちびち活きている奴が、網の中で、水しぶきをあげて跳ねるのを見乍ら、

「其の海老を五尾ほど」

「其の鯛を一尾」という風に一々注文して、直ぐ料理をして持ってきて来るのだ。これ程新しい魚の食い方はないだろう。それで何しろ安かった。今でも同じやり方で、安く新しい魚を食わせてくれるのではないかと思う。

音戸を出離れると、右に蒲刈島、左に倉橋島が段々遠くなって、瀬戸内海としては島影の少い、大分広々とした安芸灘^{あきなだ}へかかるわけである。

腰に腰みのを着けた漁師が、小舟の上に立ちただかつて、頻りに海から綱を手繰り上げているのを見る。何かと思つて眺めていると、蛸壺が上がって来る。ザツと空けては又綱を手繰っているが、船の過ぎて行く間に見た三つの蛸壺には、どれにも蛸は入っていないようであった。

波は全くなく、海に雲と空の形が其の儘映っている。余程静かな海でないと、雲の形が海に映る事はないだろう。海というより全く湖水の感じだ。そして海と空の全体が、やわらかに、ぼおっとけぶっている。間もなく、西の方へ航走して

いる、大阪商船のマークをつけた小さなタンカーに出遇う。東の方へ走っている小さな汽船も一隻見える。此の辺が丁度阪神門司間の航路にあたるのだろうと思った。

そして、前にも書いたように、三時間半の航海で、十一時二十五分に高浜の栈橋へ着いた。栈橋には阪神高浜間航路の明石丸が停泊している。今夜大阪へ帰る船だ。航洋大型客船を其の儘小さくしたミニシアのような綺麗な船だった。

松山の市内を通過して、電車で一時間ほどで道後の温泉町へ着くわけだが、松山は戦災で焼けているのに、道後はすっかり其の儘残っている。自分達の遊び場保養場に使える所は焼かないという、アメリカの方針だったのかも知れない。

道後の温泉は全部、所謂外湯で、新温泉とか、西湯とか、鷺の湯とかいう浴場があちこちにあって、旅館の客もみんな其所へ入浴に行く。一番大きな、大名屋敷のようなものへ入るが、これが一階、二階、三階と分れていて、一階は只入浴だけで十五円、二階というのは、大広間で休む事が出来て、浴衣が出て三十五円、三階は個室があって、茶菓が出て、浴室も小さな専用浴室があって、これは百円というわけである。一番安いので済ますが、湯は豊富で、風呂番の人も親切で、気持がよかった。

流し場も浴槽も、御影石で、それが可成年代が経っているのか、古びて黒くなめらかな石の肌の、浴槽の中心には、やはり大きな御影石のまるい塔のようなものが据えてあり、其

の下から湯が間断なくあふれ出ている。年寄りが、其の湯の落ち口で頻りと頸を打たせていた。

其の石の塔には、万葉集の山部赤人の「^{すめらみこと}皇神祖の神の命の敷きいます 国のことごと、湯はしも 多にあれども、伊島山の 宜しき国と、凝^こしまも 伊予の高嶺の」という、伊予の湯の歌が、万葉仮名で彫ってあった。そのあとに「明治二十七年此の石を据える」と書いてある。

湯は無色透明、口を含むと一寸炭酸性の味がする。私は絶え間無く流れている豊富な温泉に入ると、いつも、自分が豊かになったような気持がして、湯を撫でたり、掌にすくったり、口にくんだりしてみたいではいられない。

いまの日本で本当に、惜しげの無い豊富さをたのしめるものと云っては、おそらく、各地の温泉くらいのものかも知れない。

湯づかれのした気分で、道後の町をぶらぶら歩く。

戦災に逢っていないので、ふるびた店構えの菓子屋があって、タルト、白鷺羊羹、薄墨羊羹、鷺の形をした落雁のようなものなどを売っている。道後松山は、なかなか菓子屋のいいがある所のように思われた。

これから、午後三時に高浜を出る、宇品行の、私の乗って来た第十一東予丸に駆けつけければ、夕方には広島へかえるのだが、来た道と同じコースをかえるのも、つまらない気がして、遅い昼飯を食ってから、松山駅から、上りの汽車に乗

る。

海に沿って走る事、約一時間半、今治で下車して、今治の町の中はバスで素通り、棧橋から尾道行きの連絡船に乗り込んだ。

船が今治を出ると、すぐ来島海峡で、此処は渦の名所としては、鳴門に次ぐ所だという事で、油を流したようなべつとりと平らかな海面に、あばたか傷穴のように、ブツン、ブツンと渦の穴があいてそれがぎりきりと巻いているのが、不気味な面白さだった。

そうかと思うと、ザワザワとざわめき立っている所もあり、島の影から、一直線に、山川の急湍のように潮がながれ、奔っているところもあって、海が様々な形で生き物のように動いているように思われた。

船はみょうな揺れ方をして、渦を乗り切り、船尾を潮にあおられ、かじが利かなくなつて、ぐぐつと斜めに流されたりする。

然し船長も船員も呑気なもので、

「今日は大分潮が強いのもう」というような事を云い乍ら、ブリッジで、舵輪を握った儘無駄話をしている。大型船のブリッジの、神聖な任務に着いているという風な、静かな緊張した空気とは大へんちがっている。

大三島、生口島、細い瀬戸田の水道を通り、耕三寺という寺の塔などを見、遠く三原、糸崎の辺りを望む頃には日が暮

れた。

呉線をはしっている列車の赤い尾燈が、ツーと線を曳いて遠い闇の中を動いて行く。それから間も無く尾道の棧橋だった。

「暗夜行路」に書かれている、此処の港も私の好きな所である。汽車から見ると川のような狭い水道に面した港で、赤い腹の貨物船などが、いつも何杯かうかんでいる。

広島島の列車は、すぐ連絡があった。私は持って来た雑誌と、買った牛乳とパンを、空いた汽車の座席に並べて、広島までの時間をつぶす算段をする。

糸崎の駅で、車窓を呼んであるく売り子が、
「えー、ビールウツ！ えー、ウキスキツ！」

と、いやに上機嫌な調子なので、のぞいて見ると、

「えー 煙草ツ、ウキスキツ！」とふらふらし乍ら歩いている。

「売ってる人が酔っ払っちゃ駄目じゃないか」

と冗談に声をかけると、

「へえ、すんまへん。一寸一杯やったもんですけえ」

と、一杯やる恰好をして、帽子を取って、びよこんと御辞儀をした。なかなか愛嬌がある。

汽車は長い、八本松の峠にかかって行く。

退屈なので、汽車の走る音を片仮名で書くとしたら、どう書くか、等とつまらぬ事を考える。

そうすると、此の峠を上って行く列車の音は、確かに、「チャンチャンカカカケットン、チャンチャンカカカケットン」と云っている。

此の事は、それから一寸興味を持って気をつけていたが、列車のスピードや、路線の具合で、ずいぶん色々な調子のある事に気づいた。

「ケタタッタッタ、ケタタッタッタ」と云って走っている所もある。

東京近郊の湘南電車などは、「チャンチャンカカカケットン」も、「ケタタッタッタ」もやらない。

うまく片仮名で書けないが、何しろもつと気忙しい。

西条、八本松、瀬野、海田市、——広島に着いたのが十時四十一分で、ちょうど十一時に、こころよい疲れを覚えて帰宅した。

一日の旅としては、中々充実した面白い旅だった。

内海点描

吉井 勇

来島海峡

来島海峡といふと直ぐに思ひ出されるのは、その昔この辺に住んでゐたといふ海賊のことである。しかし海賊といつても、歴史的にいろいろ変遷があつて、奈良時代には純然たる海賊だつたものが、平安朝時代に入つて来ると、地方豪族に養はれてゐる海上の武士となり、その後源平二氏の闘争時代には、殆んどもう両家に属する、立派な水軍となつてゐた。

それから後、鎌倉時代、吉野朝時代を経て、室町時代、戦国時代になると、鬱勃の気を洩らすによしなく、遂に倭寇となつて海外に、その威力を発揮するやうになつた。豊臣秀吉の征韓の役には、水師としてどの位働いてゐるか分らないし、徳川時代には水軍を統轄するものを海賊奉行、或ひは海賊方

などと称してゐたものである。

それだからこでいふ「海賊」といふ言葉は、むしろ「海の英雄」といふやうな意味に取らなければいけないし、それと同時に考へられるのは、これ等の「海の英雄」の勇敢な心持は、万葉集に現はれてゐる日本民族の魂に外ならないと言ふことである。

私は昭和十一年四月十日、土佐の山峡の草廬を出てから、琴平、高松、観音寺、新居浜^{にま}などを経て、今治から波止浜^{はし}に往き、ここの公園から来島海峡を眺めながら、今言つたやうな私達の祖先の英雄的な心持をしので、事実懐旧の念に堪へなかつた。丁度春のことで、日はうらかに照り渡つてはゐたが、目の下に見える海峡の潮は、今が丁度最も流れの急な時と見えて、凄まじい響を立てて、渦を巻きながら流れてゐる。そのもの凄まじい潮鳴を聴き、そのもの凄まじい渦潮を眺めてゐると、うららかな春の日ではあるけれども私は、おのづから雄心の勃々たるを覚え、今にもそこらの島蔭から「八幡大菩薩」と書いた旗を掲げた船が、現はれて来るやうな気がしてならなかつたのである。

公園の直ぐ前にある来島には、昔大島の能島氏と並称せられてゐた久留島氏の居城の址が、今猶はつきりと残つてゐるし、海岸には昔大船の纜をつないだ跡があるさうであるが、それより私が面白いと思つたのは、その昔菊池幽芳氏があの名作「己が罪」を、この島に籠つて書いたといふことであつ

た。猶この附近から世に出た芸術家には、片上天絃、矢野橋村、同鉄山の諸氏があつて、小室翠雲氏をはじめ多くの南画院の人達の描いた絵が、このあたりに残つてゐるのも、さういふ因縁からなのであらう。

私は潮の流れがやや緩やかになるのを待つて、小さな舟でこの海峡を越えて、来島と並んでゐる小島といふ島へ渡つた。ここには波止浜の町長原真十郎氏の別荘があつたが、それは耕漁荘と名付けられた二間ほどの草庵めいた家であつて、夜になると硝子越しに、岩蔭で鰯を漁つてゐる漁船の篝火の風につれて明滅してゐるのが眺められた。私はその晩は、来島海峡を流れる渦潮の音を聴きながら眠つたが、昔の勇ましい海賊船のことを思ふと、中々しづかには寝付かなかつた。

岩 城 島

「伊予の今治から尾道がよひの小さな汽船に乗つて、一時間ほども来たかと思ふ頃船は岩城島といふ小さな島に寄つた。

港とも云ふべき船着場も、島相応の小さなものであつたが、それでも帆前船の三艘か五艘、その中に休んでゐた」

亡友若山牧水君の随筆集「樹木とその葉」の中に収められてゐる「島三題」といふ紀行文の中に、かう書かれてゐる岩城島には、昭和十一年の五月、私も伯方島^{かたし}から渡つて往つて、偶然牧水君が数日間起臥してゐたといふ、「海の中に突き出たやうに建てられ」た、古びた水楼の一室に泊つた。